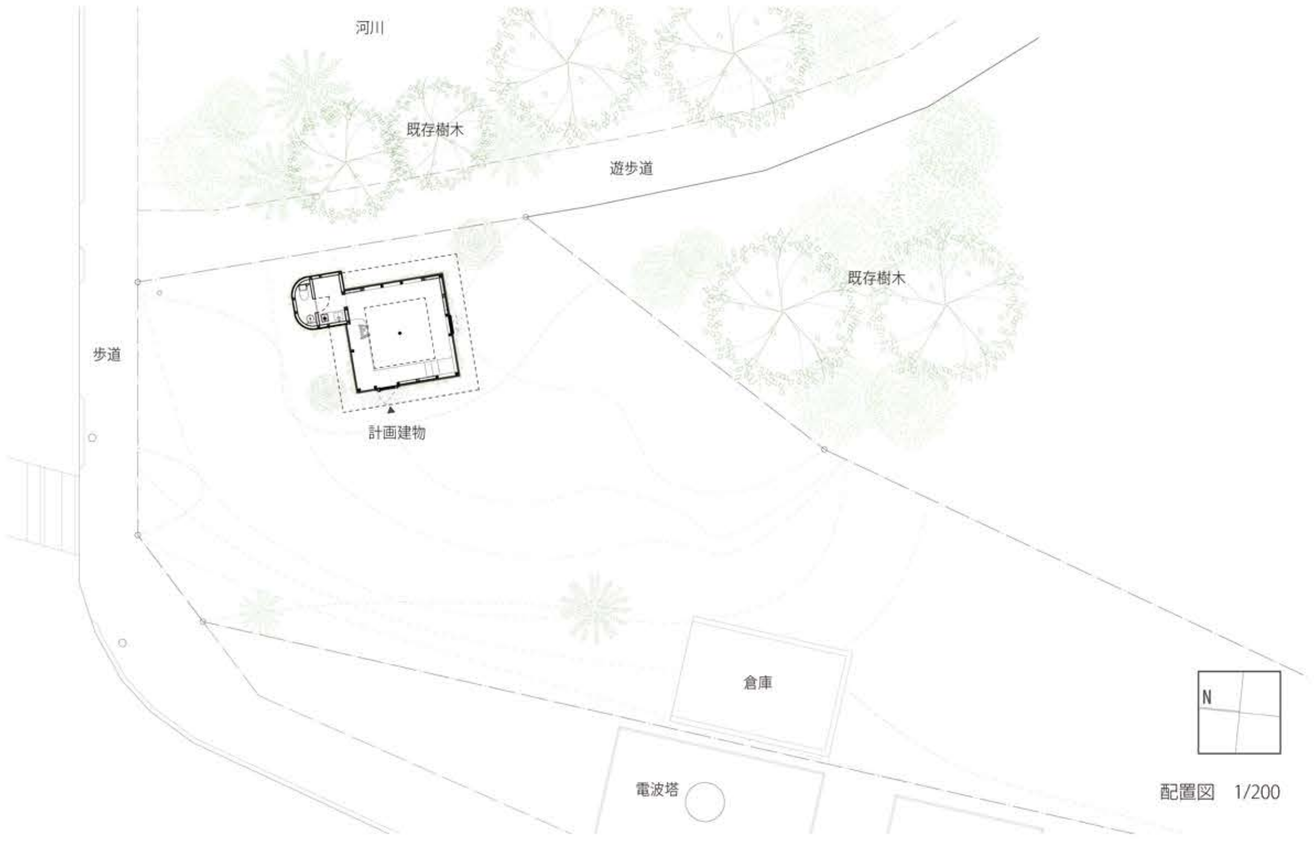
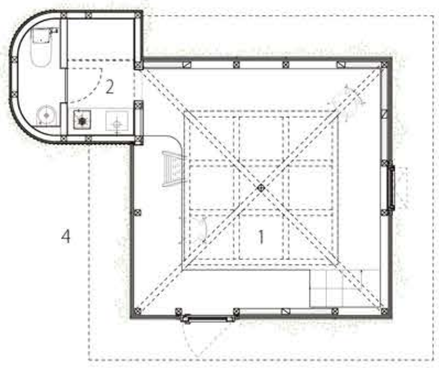
Hiraya Pavilion

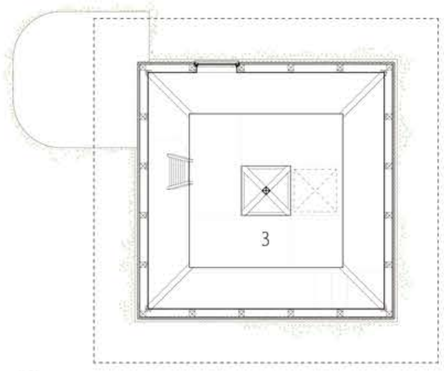
札幌市南区の石山東に計画されたプロジェクトである。敷地は緩やかに傾斜し不定形で大きく、周囲は高架や電波塔などの人工環境と、河川や緑道などの豊かな自然環境が混在し、その相反する要素の間に、人々が集い語らうことのできる座る処「座場」をつくる。
計画はローコストを前提とし、必然的に建物規模は 10 坪程度となった。我々は大きな敷地の中で小さく建つということを考えながら、最小限の操作によって周辺環境との関係を調停し、最大限の意味を創造するためのスタディを重ねた。
建物は 2 間半の平面と最小限の水廻りで構成され、用途を限定しない使われ方を想定し 1 ルームのような状態を目指した。同時に「座る」という振舞いに着目し、1 階は椅子に座り、2 階は床に座る行為を促すようにレベルや寸法を決定していく。そのため 1 階は土間レベルを半地下とし、座った際に大地や緑に近づくような明るい居場所に、2 階は天井高を抑えることで小屋裏のように少し暗がりのある居場所が良いと考えた。基壇上にはバランス良く筋交いを配して耐力壁を確保し、建物 4 周に自律した水平開口部を設けた。また、建物中心には 45 度に振った柱と二本の斜梁を据えることで剛性を保ち、4 周の壁から後退した床を実現させる。そうすることで、下階では外部環境を内部へと取り込み、上階では吹抜けを介して下階からの柔らかな光が滲む。
結果として小さな 1 ルーム空間の中に、天井が高く地面に近い遺跡のような場所と、その上部に浮いた小さな茶室のような場所が内包される。各階は取外し可能な梯子での移動が可能で、手を伸ばせば届きそうな距離の間に各階が並存する。外観も内部の場所性がそのまま投影され、大地に根差しながらも宙に浮いた様相を呈する。このように、様々な環境の間で揺れ動くような状態は、単なるスケールという相対的な意味を塗り替え続け、利用者の振舞いや意識を時間と共に更新していくのではないだろうか？



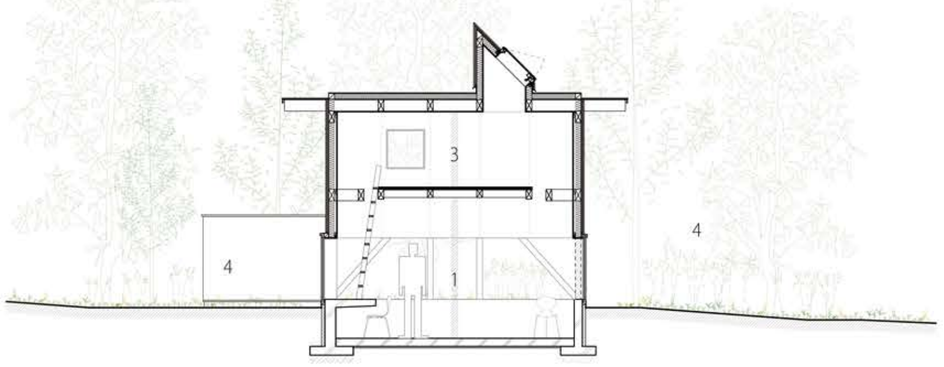
配置図　1/200



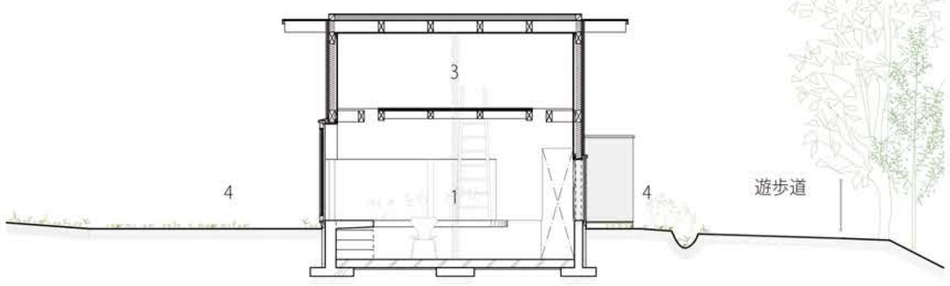
1 階 平面図　1/80



2 階 平面図　1/80



断面図 1　1/80



断面図 2　1/80

1. 座処　2. 水処　3. ロフト　4. 庭